

## ■第6章 新たな小千谷への挑戦



崩落した県道小千谷十日町津南線（四ツ子地内）



## 未来への挑戦～震災を乗り越えて、よりよい小千谷へ

平成17（2005）年に復興計画を策定した時、小千谷市民は震災によって被害を受け、打ちひしがれていました。大震災によって失われた命、多くの家や日々の暮らしを壊された「あの日」のことを、今でも忘れることができません。その中で希望を探し、必死にもがきながら、よりよい未来を目指した復興計画を策定し、10年間をかけて実行し検証をしてきました。

これまで市民は、全国からの温かい支援に励まされながら、復興に向けてそれぞれができる範囲で精一杯あゆんできました。震災後途絶えていた闘牛などの伝統行事が復活、壊された棚田や養鯉池を再建、今まで以上にまちを元気にしようと活動する市民グループの活躍など…。

中越大震災から7年目の3月11日、東日本大震災が発生しました。「あの日」を思い出す、凄まじい揺れ、そして津波。現地に行った人、避難者を受け入れた人、それぞれが被災地への支援を行う中で、市民は「支援される側」から「支援する側」に大きく転じました。

今の小千谷市は震災の爪痕のほとんどが修復され、大震災があったことを感じる場所は少なくなりました。でも、私たちは「あの日」のことを決して忘れません。そして、これまでの道のりを決して忘れることはありません。

復興計画が終了を迎える平成26年は、中越大震災から10年を迎えると同時に、市制施行60周年にあたります。人間で言えば還暦にあたり、第2の人生のスタートです。小千谷市誕生から60年間の発展と、震災から10年のあゆみによって得た知恵と努力を紡ぎながら、「あの日」の経験と教訓を語り継ぎ、市民みんなでよりよい小千谷を創っていかねばなりません。「誰もが生涯楽しく住み続けることのできるまち」小千谷を創る、未来への新たな挑戦を始めます。



ボランティア団体が寄贈したモニュメント（楽集館）